散華（さんげ）

紫式部の生涯

下

杉本苑子

時を超える名作『源氏物語』に
紫式部が仮託した男と女の愛とは—

三年に満たぬ結婚生活や華やかな宮仕えでもいやされぬ心の苦しみを通し、血なまぐさい権力抗争の現実と人々の浮き沈みとを見すえつつ、ひとりの女として生きた式部の生の軌跡を克明につづる歴史大作。

中央公論社　定価1650円（本体1602円）

杉本苑子

散華（さんげ）

紫式部の生涯

下

散華（さんげ）——紫式部の生涯——下

©一九九一　検印廃止

一九九一年二月二〇日　初版発行
一九九一年一一月一〇日　一〇版発行

著者　杉本苑子
発行者　嶋中鵬二
印刷所　三晃印刷
製本所　大口製本
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替　東京一-三四

ISBN4—12—001995—0　Printed in Japan

散華（下）目次

越前国府 5
移りゆく日々 53
光る源氏　輝く日ノ宮 144
出　仕 212
道長呪詛事件 265
宇治十帖 300
人形から賢后へ 335
ねむの花 364
あとがき 389

装画　加山又造「朧」部分

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

散（さんげ）華
――紫式部の生涯――　下

越前国府

1

旅仕度が終ったときは、秋も半ばをすぎかけていた。

小市を姉上と呼び、小市も相手を中ノ君と呼んで、おたがいに歌稿を見せたり、物語の読後感を述べ合って楽しんだりしていたあの、橘為義の娘万奈児が、ここ一、二年の間めったに音信をよこさず、訪ねても来なくなったのは、男を持ち、子を生んだからである。

この結婚は、しかし長つづきしなかったらしい。もとの独り身にもどるとまた、彼女は文通を再開し出したのだが、藤原為時と同じく長徳二年春の除目で、橘為義が肥前守に任ぜられたため、やはり父と一緒に、子づれで任地へくだることになり、小市たちよりひと足早く都を発って行ったのであった。

「姉さまは北陸、わたしは九州……。別れ別れになるにしても遠すぎて、ひとしお心細さがつのります」

だの、

「水のちがう辺地へ幼い者を伴って、もし病みでもしたら取り返しがつかぬと親族どもは意見がましく申しますけど、子供を置いてゆく気には到底なれません。お察しください」

そんな思いを、歌や手紙に託してしばしば告げてきたし、旅路の途中でも幾首となく、耳目に触れた光景を感傷たっぷりに万奈児は詠んでよこしたが、出立直前の怒忙の中だけに、小市には少々それが煩わしかった。

でも同様、受領を親に持ち、同じ年にそれぞれの任国へおもむくという境遇の相似が、仲間意識をかきたてもする。小市は面倒がらずに返事を書き、いささか歌調にそっけなさが滲むものの、そのつど一応は、返歌を作って贈りもしたのであった。

――越前へは逢坂山を越えて、まず大津の打出ノ浜を目ざす。近江の琵琶湖の最南端に位置する舟つき場である。

いよいよ為時と小市の一行が京極の古屋敷をあとにした日は、さいわい晴れあがって、旅立ちには絶好の秋日和となった。出入りの陰陽師饗庭晴久が、しかつめらしく卦を立てて、

「上々吉日」

と選んだ日だけに、路次の安全は保証されたはずなのに、いざ住み馴れた洛中を離れるとなると、やはり小市は平静でいられない。別れを告げにきてくれた人々へのあしらいも、ともすると上の空になりがちだった。

何の進展も見せず、ただ長年月、だらだら続いてきただけにすぎぬ藤原宣孝との関りに、きっぱりけりをつけるつもりで思い立った越前行きである。そのくせ、

（これでよかったか？　ほんとうに悔いはないか？）

自問をくり返すうちに不安が拡がって、落ちつきを失ってしまうのだ。

打出ノ浜までは、伯父の為頼と叔母の周防が見送りに来てくれた。弟の惟規(のぶのり)もむろん、ついてきたし、友人では仲よしの御許丸が彼女自身の車でやって来た。橘道貞と結ばれ、和泉式部(いずみしきぶ)の女房名であいかわらず昌子太皇太后の御所に勤めている彼女は、

「ああ気持がいい。ひさしぶりに水の輝きを目にしたせいかしら。このまま越前でも越中でも、小市さんと手をつないで行ってしまいたいような浮き浮きした気分になったわ」

車からおり、渚へ走って思いきり背すじを伸ばした。

小市もここまでは周防と一つ牛車(ぎっしゃ)に共乗りして来たのだが、逢坂の、関の清水の脇を通りすぎたときは、胸の波立ちが一層ひどくなって、つい叔母の顔色を盗み見てしまった。袴垂れ保輔が行き倒れた死人を装い、うかうか近づいた旅の侍から身ぐるみ剝ぎ取って逃げた街道筋である。

(いつのまにかもう、二十年近くたった。保輔どのが捕えられ、処刑されてからでさえ、かれこれ七、八年の歳月が流れ去っている)

がらりと何もかもが変ってしまったようにも、あれ以来、時が止まったきりまったく動かなかったようにも感じられるのが、小市には不思議でならない。

激しい変化を感得する一方で、その、同じ意識の中に共存もしている停止の感覚……。おそらく今、思い出の場所を通過中なのだと知りながら、簾(す)の外へチラリとも視線を投げようとしない周防の、沈静した表情を見ていると、彼女をめぐる〝時〟の推移は、

(保輔どのの死を境に止まったきりなのではないか。恋人の俤(おもかげ)を閉じこめたまま凍りついた河さながら、永久に流れるのをやめたのではないか)

そんな想像が小市の胸をよぎりもする。

岸には舟が二艘つながれ、口々の別辞があちこちで交されていた。為時父子とその縁者だけではない。越前へは御厨ノ乳母をはじめ、男女合せて二十人を越す奉公人が供をする。うちの半数以上は国司に任官してから必要に応じて傭い入れた新参りだが、彼らの家族もおおぜい見送りに来ているし、そのどちらともつかぬ若い男どもも、うろうろと六、七人混っていた。これは親たちや当人みずから新任の国司にたのみこんで、任国へ同行し、国衙の下吏として使ってもらおうと目算している連中であった。

現地採用されて一生よそへ移らぬいわば土地生えぬきの、吏務に練達した在庁官人のほか、中央から派遣され、任期だけ勤めて帰洛してしまう役人もいるのが国府の実態だが、従者の名目で親戚や知人の息子をつれてくだり、下ッ端の役職に押し込むくらいのことは、国司ならだれもがやっていた。

為時の場合も越前赴任の噂が伝わると、子弟の身のふり方を依頼しに訪れる者が多く、中には、「守の家人として召し使っていただくだけでも過分にぞんじます」

そんな言い方までして身柄を預けようとする気ばやな例も見られた。

やる気のありそうな若者を数人、そんななかから選び出して為時は一行中に加えたのだが、彼らの血すじも見送りに来ているから浜辺の混雑はなかなかのものなのであった。

荷駄のほとんどは先送りしてあり、輿や鞍置き馬なども昨日のうちに湖岸の道を塩津まで運ばせておいたので、舟には人が分乗するだけでよかった。

「越前の国府からは白山の山脈が遠望できる。京にはない壮大な景観だ。古刹も多く、歌枕に詠まれた名勝も少なくない。できるだけ訪ね歩いて、詩嚢をたっぷりふくらませてもどれよ」

「兄上のお世話、たのみますよ小市さん。冬が早く来る土地だそうだから、着くとすぐ雪を見る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ことになるでしょうけど、風邪など引かないようにね」
為頼と周防が、こもごも心づける横合いから、御許丸が大きな髭籠を割りこませて、
「船中での退屈しのぎに食べてちょうだい。中身は開けるまでのおたのしみ……」
いたずらっぽく笑ったのは、果物でも入っているのだろうか。
歌が添えてあるのだが、返しを詠むひまもなく惟規が、
「姉さん、ちょっと……」
袖を捉えて小市を物かげへつれて行き、
「ことづけがあるんだ。『手紙を書いても読まずに湖水へ投げ捨ててしまうだろうから、惟規どの、口で聞こえあげてくれ』って、ある人にたのまれたんだよ」
「だれ？」
「きまっているじゃないか。宣孝どのだよ」
とうとうあきらめて、最後にひとこと、辛辣な嫌味でも言って寄こしたのかと内心、小市は身がまえたが、弟を介しての愬えは、
「あきらめなどしませんよ」
と言うものだった。
「洛中からの脱走を決意なさるまできらわれるとは、われながら愛想の尽きるみじめさですけど、逃げる獲物ほど追いたくなるのも猟師の本能です。越前はおろか唐・天竺へだって小市さんがいらっしゃるならわたしはあとを慕って行きます。朝廷へは『敦賀に漂着した宋国人を見にまいりたい』と願って出て、休暇をいただきますから、どうかそのつもりでいてください」
そう、ことづけて寄こしたのである。

「わかったわ。『たしかにうけたまわりました』と申しあげておいて」
「それだけ？」
「ほかに何を言えというの？」
「素気ないなあ。でもいいや。伝えておくよ。身体に気をつけてね」
「あなたこそ宣孝どのみたいな悪友の腰巾着で飲み歩いてばかりいたら、身体をこわしますよ。異母弟の惟通を見習って、少しは勉学に身を入れなさい」
「お説教かあ。はいはい、これもたしかに、うけたまわりました」
姉の声色を真似て茶化したとき、
「どこへ行ったあ小市、舟が出るぞう」
舟着き場の方角から為頼伯父の大声が聞こえた。
「あ、もう纜を解くらしいわ」
走ってもどると、すでに父も召使もが、ほとんど乗船し終っていた。
「小市さま、早く早く」
御厨ノ乳母に手を曳かれて、あぶなかしく渡り板を踏みながらも、小市の足取りは軽かった。我れながら可笑しいほど気分が直りはじめていたのだ。
（宣孝どのは、けっして訪ねてなど来はしない）
それは判っている。今日かぎり切れてしまうつもりの相手に、しかし充分まだ、未練があるようなそぶりを示してみせたのは、宣孝の思いやりであり、心くばりにちがいなかった。自分を嫌いぬいて、手の届かぬ遠国へ逃げて行こうとしている女ではないか。とげとげしい言葉を投げつけるか、冷たく無視してよいところなのに、宣孝はそれをしなかった。小市の側に花を持たせる

形で二人の交際を終らせたのは、それだけ大人だからだろう。おかげで弟の手前、小市は恥をかかずにすんだ。腹立ちや不快を味わわず、優位に立ったまま、しかも宣孝の美点を一つ確かめえた爽やかさの中で、気持よく別れられたのである。

「さようならあ」

「お達者で……」

浜辺にひしめいて手を振る人々へ、小市も、

「さよなら」

胴ノ間から伸び上るように応じたが、その笑顔は、ここにはいない宣孝へも向けられていた。

2

湖のほぼ中央を、二艘の舟はまっすぐ北上した。波ひとつない水面は、晩秋の日ざしを照り返して、みつめつづけるのがつらくなるほど眩しい。三井寺に詣でたおり、境内から木の間がくれに見おろしたことはあるけれど、舟に身をゆだねて湖水を渡った経験は、小市にも御厨ノ乳母にも初めてだった。

「洛中から眺めるのとはあべこべに、こうして裏側から近々と仰ぐと、いまさらながら叡山の高さにおどろきますねえ小市さま」

「その先につらなるのが比良の山々ね」

「あれあれ、東の山裾をごらんあそばせ。丹塗りの仏塔が見えてきましたよ」

「長命寺の塔ではないかしら……」

「ときわ木の緑に紅葉がまじって、森の美しさは今ごろが一番ですね」

沖ノ島が現れた。あれは多景ノ島、行く手に竹生島も見えはじめたなどと、移り変る景観に目を奪われ通した小市だが、半裸体の漁師らが、女子供までまじって網を引く姿にわけて興味をそそられた。

「漁をしているあの辺は、何という所？」

船頭にたずねると、三尾ヶ崎という塩辛声の答えが返ってきた。

男の使う具注暦を、小市も父の為時にねだって今度の旅に一冊たずさえてきている。歳位、星宿、干支、節気、陰陽道の禁忌吉凶や年中行事などをこまごまと木版で刷った便利な暦で、四、五行分の余白に毎日のできごとを日記として書きとめることもできる。

小市はそこへ歌をしるした。旅中の嘱目をできるだけ三十一文字にまとめて、歌日誌のようなものを作って置いたら、のちのち思い出のよすがとなるのではないかと考えたのだ。

三尾の海に網引く民のてまもなく
立ち居につけて都恋しも

覗きこんだ御厨ノ乳母に、

「もう今から都を恋しがるようでは先ゆきが思いやられますね」

笑われたが、小市にすればこれは、京と、京に残してきた人々への儀礼のつもりだった。

乳母は御許丸から贈られた髭籠を開いて、

「おやまあ、おいしそうな茹栗と柿。唐菓子の包みまで入れてございますよ」

弾んだ声をあげる。そろそろ眺望に飽きはじめていた船中の、手から手へ籠が渡され、

「これはうまい、油で煎った索餅ですぞ」
「守もあがってごらんなされませ」
がやがや賞味し合ううちに空がいきなり暗くなって、縦横に稲妻が走りはじめた。雷鳴がとどろき、どしゃ降りの雨まで襲いかかってきたのだ。この季節には珍しい夕立である。
「蓆はないかッ、いそいで苫を葺けッ」
「それより傘を……」
「傘などこの風では飛ばされてしまうぞ」
あわて惑うのも小市には面白い。苫の下に這いかがまりながらまた筆を握って、

かき曇り夕立つ波の荒ければ
浮きたる舟ぞしづ心なき

具注暦の余白に一首書きとめた。いったん荒れ出すと、琵琶湖は湖水と思えぬほど猛々しく牙をむき、舟は翻弄されて髭籠も瓶子も、胴ノ間をごろごろ転げ廻るほどになる。
「わたしは泳げません。助け給え竹生島の竜神さま」
かなきり声で喚きたてた乳母も、黒雲が去り、明るくなった空の一方を、つかのま、短い虹が飾るころには憑き物が落ちたようにケロリとして、
「もったいない。お酒がすっかりこぼれてしまいましたよ」
割れた瓶子を惜しむゆとりさえ生じた。
水夫どもは湖上の驟雨など馴れっこなのか、叩きつけてくる水しぶきを浴びながら櫓の手を休

めず、騒ぎのあいだも舟は進みつづけて、やがてゆっくり塩津の入江へすべり込んだ。
「さあ、ここからは陸路だぞ小市、山道にかかると、輿からおりなければならぬときがある。大丈夫かな？」
父の気づかいへ、
「山道でなくてもなるたけ歩きますよ。乗り通していると輿はかえってくたびれますから……」
元気よく小市は応じた。
先着していた荷駄と合流し、一行は北陸道をたどって塩津山を越え、まず越前の敦賀へはいった。海陸の要衝に当り、古くから気比の社が斎かれている。海の守り神である。
越前国府の出先機関ともいってよい役館が置かれ、下役が詰めていたから、歓待を受けて一行は二日ほど敦賀に逗留した。宋からの漂流民もこの役館の一画に抑留されているという。
「正式にはいずれ国府に到着後、身柄をそちらへ移して尋問するつもりだ。しかしその前にどのような身分の者どもか、人品だけでも一見しておこう」
為時はそう言って宋人たちと会い、彼らが半官半民の立場で交易を求めに来た者だと知った。ただし渡航の途中、暴風雨に遭い、船の転覆を防ぐため積荷を捨てたので、現実には日本国側の保護を必要とする難民とえらぶところがない。
小市もはじめて目にする異国人が珍しく、御厨ノ乳母や供の女房たちと重なり合って壁代のかげからこっそり隙見したけれど、言葉を理解できないほかは、風貌にも物腰にも日本人との差はさほど感じられなかった。
敦賀の商人で、宋国へあきないをしに渡り、半年近く滞在して帰ってきた者がいる。大藤太と名乗るその男が通辞の役を買って出ていたが、たどたどしいばかりか、いい加減な出まかせでつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com